

その他

高等教育機関で学ぶ学生の障害観に関する文献検討 — 看護基礎教育における障害児（者）支援の 教育方法への示唆 —

水野 芳子*・田中 学*・西村 あをい*

要旨：高等教育機関で学ぶ学生の障害観に関する研究の動向を明らかにし、看護基礎教育における教育方法の検討及び課題についての示唆を得ることを目的に、文献検討を行った。「障害観」「障害者観」「学生」をKey wordsとして医学中央雑誌及び国立情報学研究所のデータベースを利用し文献検索を行い、該当した文献の研究内容の比較検討を行った。対象論文は15編であり、研究者の専門分野は多岐に渡っていた。研究内容から教育方法として、重症心身障害児（者）との接触・援助体験や事前学習、対象の反応の意味や特徴を把握できるような臨地実習指導の工夫が示唆された。

キーワード：学生, 障害観, 看護基礎教育

Literature Review on Attitudes Toward Disability in Students Pursuing Higher Education: Considerations for Teaching Strategies in Nursing Education

Yoshiko MIZUNO*, Manabu TANAKA* and Awoi NISHIMURA*

Abstract: This literature review was conducted to identify trends in research on attitudes toward people with disabilities among students at institutions of higher education and gain insight into teaching strategies for enriching those views in basic nursing education, as well as related issues. The Japan Medical Abstracts Society (ICHUSHI) and CiNii databases were searched using the keywords “attitudes towards the disabled” (Japanese: *shōgai-kan*), “attitudes towards disabled people” (*shōgaisha-kan*), and “students” (*gakusei*). Fifteen corresponding studies from authors in wide-ranging fields of specialization were identified, read in detail, and comparatively analyzed. Several teaching strategies to improve students’ attitudes toward disability were identified: preparatory study, first-hand exposure to and helping of children (and adults) with severe physical and mental disabilities, and community-based practical training to allow students to better understand the characteristics of this population and how they react to the general public’s attitudes.

Keywords: Student, Attitude toward disability, Nursing education

I. はじめに

近年看護基礎教育における小児看護学実習の場は、病院だけでなく在宅や通所施設など子どもたちの生活を支援する場を含めて多様になり、実習前後の質問紙調査や実習後レポート内容の分析など実習効果の評価も検討されている（砥綿ほか 1987）[1]、（西脇ほか 1995）[2]、（下見 1997）[3]。これらは1～3.5日の実習による学生の障害児に対するイメージや困難感の変化を分析し、いずれも肯定的な変化が認められていた。しかし一方、重症心身障害児に初めて接した学生が、「びっくりした」「こわい」「気持ち悪い」などの感情を抱いた（砥綿ほか 1987）[1]、（西脇ほか 1995）[2]、（下見 1997）[3]、実習学生の78.4%がショックを受けた（八藤後 2004）[4] 等の報告がされている。

わが国では、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであるインクルーシブ教育の推進が取り上げられ活発化している。平成22年（2010年）には、文部科学省からインクルーシブ教育理念の方向性が示され、教育現場では共生社会の実現に向けて様々な取り組みが行われつつある。そのため、高等教育機関で学ぶ学生の中には、特別支援学級との交流や知的障害・身体障害児とともに過ごした経験を持つ機会も増えているものと考えられる。また近年、生じている発達障害児の増加（発達障害児で「通級指導」を受けている児童は9万人を超え、20年で7倍に増加：文部科学省平成25年度）により、高等教育機関で学ぶ学生は発達障害児との接触や交流を幼い頃から経験しているものと考えられる。しかし、在宅療養をしながら特別支援への通学や障害児施設等に入所し訪問学習を受けている重症心身障害児（者）との交流経験を持つ学生は少ないのではないかと考えた。

本学の小児看護学実習は、地域で生活する子どもと家族、その環境及び様々な場における小児看護に必要な基礎的能力の習得を目的として、保育所2日間、NICUまたは小児科病棟3日間の他、重症心身障害児（者）病棟、小児科外来、重症心身障害児（者）通所施設、特別支援学校での実習を予定している。近年在宅で医療的ケアを受ける子どもや児童発達センター、療育センター等の地域で小児看護に関わる看護師の数は近年増加している。小児看護学の領域において、重症心身障害児（者）の支援に関

わる臨地実習の取り組みは、地域包括ケアが推進される今後の日本社会を見据えたカリキュラムであるが、短い実習期間の中で学生が重症心身障害児（者）との関わりにネガティブなイメージを持たず、最大限の学習効果を得るための教育方法を検討したいと考えた。

看護教育における看護学実習は、他の専門職教育と比較し、その学習方略、時間の長さ、実習環境など他に類をみない特殊な授業形態である（ポーリット&ベック）[5]。授業としての看護学実習の成立要件は、教師、学生、教材であり、その教材である患児（者）に対してネガティブなイメージを持っていると学習は促進されない。共生社会が推進されているとはいえ、重症心身障害児（者）に接した経験がない学生が、臨地実習より前に重症心身障害児（者）について肯定的なイメージ、すなわち障害（者）観をもつにはどのような教育や経験が効果的なのか、看護学生の障害（者）観の特徴は何かについて文献検討を行った。しかし、看護学生を対象とした重症心身障害児（者）施設や病棟での実習の効果を検討した報告は多くみられたが、障害（者）観に関する研究は少なかった（杉森 1990）[6]、（岩田 2002）[7]、（大塚 2006）[8]。

そこで、看護学生のみではなく高等教育機関で学ぶ学生を対象とした障害（者）観に関する研究を再検討し、学生の障害（者）観の特徴と影響した経験や教育方法について明らかにすることを目的として、看護基礎教育における障害児（者）の看護支援に関する教育方法を検討したいと考えた。

II. 研究目的

高等教育機関に所属する学生の障害（者）観に関する研究の動向を明らかにし、看護基礎教育における障害児（者）の看護支援に関する教育方法への示唆を得ることを目的とした。

III. 研究方法

1. 検索手順

Web版医学中央雑誌及び国立情報学研究所（CiNii Articles）のデータベースを利用しオンライン検索を行った。「障害観+学生」及び「障害者観+学生」で検索を行い、79件が該当した。（2019.01.31アクセス）

その中から学生の障害（者）観に焦点が当てられ

ていない文献、精神障害を対象とした文献を除外し、原著論文のみを対象とした。

2. 分析方法

対象文献の分析は、研究対象及び方法、結果を抽出し、簡潔に表現し、比較する方法をみつける（松本・富岡 2017）[9] ために研究者間で読み合わせ熟読した。その後、対象の特徴と障害（者）観及び障害観の変化に影響した内容に着目して分類し、類似性をもとに整理した。分析の質を担保するために、小児看護の研究者3名で文献を精読し検討した。

IV. 結 果

1. 対象論文の概要

①文献数と発行年

対象となった文献は15件であった（杉森 1990）[6]、（岩田 2002）[7]、（大塚 2006）[8]、（河内 2004）[10]、（鈴木ほか 2016）[11]、（権明ほか 2015）[12]、（鈴木ほか 2014）[13]、（中山・向井 2006）[14]、（本保 2009）[15]、（河津ほか 2012）[16]、（堀ほか 2007）[17]、（仲山ほか 2003）[18]、（里村・栗原 1992）[19]、（雲野ほか 2011）[20]、（関谷 2013）[21]。

発行年は、1990年代に2件、2000年代7件、2010年代6件であり2010年代の6件のうち3件は同一研究者グループからの報告だった。著者は、看護教育者が3件、作業療法教育1件、歯科関連教育1件、

福祉系教育2件、保育・児童教育5件、教育等3件だった。

②研究対象者

対象論文の研究対象者の所属は、専門学校1件、短期大学5件、4年制大学8件、不明1件で、すべて人を対象とする専門職に関する高等教育機関であった。

③研究方法

研究方法について、質的研究は6件あり、半構造化面接が2件、他の4件は全て講義のリアクションペーパーまたは体験後のレポートの内容の分析だった。量的研究は9件であり、自作の質問紙を使用したものが5件だった。他の4件は、八藤後ら（2004）[4]の「障害児・者観についての質問紙」、浅井（1999）[22]による「障害のある人への偏見及び受容と思われる態度・意識調査用紙」、河内（2004）[10]の「自己効力感尺度」「障害者観尺度」がそれぞれ使用されていた。

2. 分析結果

対象論文の研究の概要を表1に示す。研究結果を障害観の形成に影響する要因に着目して5つに分類した。

- 1) 【介護等体験、重症心身障害者施設実習体験、ボランティア体験は障害観を肯定的に変化させる】
障害児と家族との対話と講話という体験（河津ほ

表1 障害観の形成に影響する要因

1) 【介護等体験、重症心身障害者施設実習体験、ボランティア体験は障害観を肯定的に変化させる】			
タイトル	対 象	調査方法	内 容
児童学科の学生の障害児・者に対する意識-10年前との比較から	児童学科学生	自記式質問紙法 障害児・者に関する意識調査12項目を10年前の結果と統計比較	・3年生は、1998年との比較において、「わからない」との回答が減少しており、よりはっきりと肯定的または否定的な態度・意識を示し、自分なりの障害児・者観を持つようになっていた。 ・10年前より1年生・3年生共に「理解」「実践的行為」「統合」因子で肯定的・好意的な回答の割合が増加しており、障害児・者への理解が深まり、共生に向けた態度や意識が高まってきている。
“介護等体験”が大学生の障害児・者観におよぼす影響について 文教大学の事例から	教育学部学生	自記式質問紙法 体験参加群と不参加群それぞれに障害児・者観に関する5領域に関する項目を調査	・介護等体験の「事前指導」の有効性が示唆された。 ・2日間の体験によって「意識（理解）」や「態度」に変容をもたらしたと断言することは避けるべき。 ・体験直後の得点増加、さらには3か月後の得点の「持続性」の傾向が推察された。
看護教育とボランティア（第二報）看護学生の体験報告から障害理解の構造を分析して	看護短期大学学生	ボランティア体験報告書の内容を質的分析 各フレーズについて類似する内容を11項目に分類	・ボランティア体験を通し、障害児への理解を、知識化と情緒的理解の両面から深めた。 ・体験前の偏見に気付き、自ら肯定的な障害観を再構成していた。 ・ボランティアとして障害児の身近に生活する体験は、実習内容に質的効果を与えていた。

2) 【障害児・者との接触体験は、肯定的な障害観育成に重要である】			
タイトル	対 象	調査方法	内 容
保育者を目指す学生の障害観に関する研究(2) 障害のある子どもとの出会い経験の実態把握	保育者養成課程1年生	自記式質問紙法 「障害のある子どもとの出会いに関する調査」を用いて調査し、経験は単純集計、エピソード記述は先行研究を基に分析、思いや考えはカテゴリー化し、分析	<ul style="list-style-type: none"> ・保育所・幼稚園から高等学校までの時期での障害児・者との出会い経験として、対象者の約8割が出会い経験をもち、一緒に過ごした経験を有している傾向がうかがえる。があった。 ・障害のある子どもとの出会いの有無は、障害観に影響を与えている可能性があるといえる。
重度肢体不自由の高等部生と共に取り組んだ学生の障害理解を深めるための授業の試み 学生の意識の変容を中心に	看護短期大学学生	レポートに記された内容を質的分析 重度肢体不自由児と母親による講話と対話を実施した講義前後におけるレポートをKJ法で分析	<ul style="list-style-type: none"> ・接触体験によって、負のイメージから正のイメージへの転換が図られることが明らかになった。 ・学生自身の障害者観の肯定的な変容を促し、新たな自分を発見できる時間となるなど、学習効果が高く有用であった。
歯科技工士学生および歯科衛生学生の障害観に関する研究 専攻・接触経験・知識の違いによる比較	歯科技工士養成、歯科衛生士養成、児童学科学生	自記式質問紙法 属性・障害観・障害者との関りの経験・ボランティア体験の有無を調査し、統計学的分析	<ul style="list-style-type: none"> ・学年の主効果は児童学科でのみ差を認め、歯科技工・歯科衛生では差はなかった。 ・障害者とのかかわりは、実践好意領域においてのみ接触経験あり群が優位に高かった。 ・授業を通してのボランティアでは差が認められず、自主的な募集ボランティア経験は、実践的好意領域で経験あり群が高かった。 ・知識得点の高い学生は障害者への態度もおおむね良好で理解度の低い学生は障害者への態度が肯定的ではない。
障害者福祉論の体験学習評価 障害観の形成について卒業時のアンケート調査結果から	看護専門学校学生	自記式質問紙法	<ul style="list-style-type: none"> ・体験学習が障害者と接する抵抗感を軽減させた。障害者の生活や状況、制度への関心ももてた。ノーマライゼーションの考え方に変化があった。
身体障害学生との大学内交流における社会福祉専攻学生の自己効力予期	福祉系大学学生	自記式質問紙法 自己効力予期に関する20項目と障害者との接触経験を調査し、統計分析	<ul style="list-style-type: none"> ・障害学生との交流自体は女の方がより積極的であるが、障害学生に対して率直な対応をするという点では男の方がより積極的であるという傾向を認めることができる。 ・障害者との接触経験のある方がない方よりも自己効力予期は高い。 ・社会福祉系専攻学生と文科系専攻学生、理科系専攻学生の自己効力予期はほぼ同水準にあった。
作業療法学生の持つ障害者観	作業療法学部学生	自記式質問紙法	<ul style="list-style-type: none"> ・実習前後で障害者観に差はない。精神障害者の人間としての権利や社会生活の適応性を身体障害者に比較して低くとらえる傾向があった。
3) 【学年が上がるほど態度・意識が肯定的に変化する】			
タイトル	対 象	調査方法	内 容
保育者を目指す学生の障害観に関する研究(3) 障害のある子どもの保育についての考えとその変化	保育者養成課程3年生	半構造化面接 「保育所や幼稚園での障害のある子どもの受け入れは誰にとって意味があるのか」「考えは学年が進行することで変化したか」「障害のある子どもへの保育の考え方」の質問項目について質的分析、回答傾向の分類、先行研究のコード化を基にした分析を実施	<ul style="list-style-type: none"> ・「保育所や幼稚園での障害のある子どもの受け入れは誰にとって意味があるのか」は、全員が両方の子どもに意味があると回答。 ・保育者養成課程を経る中で、障害のある子どもへの保育についての考えは変化し、適切な保育環境において障害のある子どもを受け入れることには肯定的な考えとなる。 ・3年生の段階では、広い視野に立って障害のある子どもの環境を意識するには至っていない。

児童学科の学生の障害児・者に対する意識-10年前との比較から	児童学科学生	自記式質問紙法 障害児・者に関する意識調査12項目を10年前の結果と統計比較	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生と3年生の比較では、「理解」「期待」「実践的行為」「統合」「責任」のすべての項目において、3年生の方がより肯定的な回答を示していた。 ・障害児・者について学ぶことは、障害児・者に対する肯定的な意見の獲得につながっていることがうかがえた。
福祉系大学生における障害者観の変容～学年差の横断的検討～	福祉系大学学生	自記式質問紙法 障害児・者に対する偏見および受容と思われる意識や態度10項目を調査し、統計分析	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生より4年生において障害のある人に対する「共生感」がより強く、受容度がより高い傾向にあった。 ・福祉系学生の障害者観が、在学中に好意的方向に変容していくことを明らかにしている。
4) 【障害観形成には、学生自身の感情や既存の知識、性別、専攻分野により特徴がある】			
タイトル	対象	調査方法	内容
保育者を目指す学生の障害観に関する研究(4) 大学4年生の語りからみた成長と課題	保育者養成課程4年生	質的研究、半構造化面接 保育者養成課程を終えた学生に対し、「障害のある子どもの保育に携わることのイメージ」「障害のある子どもの保育についての考え方について」を調査し、回答内容分析	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者となったときに障害のある子どもとかわることは認識できており、障害のある子どもの保育に携わる『私』イメージが作られていることがわかった。しかし、携わることはわかっていながらもその方法は具体的に抱けていないことが課題。
保育士を目指す学生の「障害」観に関する一考察 障害児保育にかかわる「保育者」として	保育者養成課程学生	講義のリアクションペーパー内容を質的分析	<ul style="list-style-type: none"> ・「障害は個性である」という学生の記述には、「障害」に対して肯定的もしくは肯定的であろうとする姿勢が表れている。 ・不自由さや生きづらさを持つ姿を「そのままがいい」と認め、受け入れようとしている
歯科技工士学生および歯科衛生学生の障害観に関する研究 専攻・接触経験・知識の違いによる比較	歯科技工士養成、歯科衛生士養成、児童学科学生	自記式質問紙法 属性・障害観・障害者との関りの経験・ボランティア体験の有無を調査し、統計学的分析	<ul style="list-style-type: none"> ・学年の主効果は児童学科でのみ差を認め、歯科技工・歯科衛生では差はなかった。 ・障害者とのかわりかは、実践好意領域においてのみ接触経験あり群優位に高かった。 ・授業を通してのボランティアでは差が認められず、自主的な募集ボランティア経験は、実践的好意領域で経験あり群が高かった。 ・知識得点の高い学生は障害者への態度もおおむね良好で理解度の低い学生は障害者への態度が肯定的ではない。
障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件、対人場面及び個人的要因の影響	国立大学「障害学入門」受講生	自記式質問紙法 自己効力感尺度と障害者観尺度、障害者への関心項目、援助経験の有無を調査し、統計分析	<ul style="list-style-type: none"> ・援助経験の学習は健常学生の抵抗感を軽減させる有効な手段。「当惑関係」因子は女子が、「自己主張」因子は男子が抵抗感を弱める。
看護学生の身体障害者観 看護学生の実習レポートの分析	看護学生(学校種類不明)	実習後レポート内容を質的分析	<ul style="list-style-type: none"> ・「身体障害者のイメージ」「身体機能障害の心情」「障害受容に対する考え」「身体障害者への対応・戸惑い」の4カテゴリを抽出。 ・学生が記述した身体障害者の心情や障害の受容過程は、学生自身の感情や既存の知識が反映していた。
5) 【時代の変化とともに障害観も変化する】			
タイトル	対象	調査方法	内容
児童学科の学生の障害児・者に対する意識-10年前との比較から	児童学科学生	自記式質問紙法 障害児・者に関する意識調査12項目を10年前の結果と統計比較	<ul style="list-style-type: none"> ・3年生は、1998年との比較において、「わからない」との回答が減少しており、よりはっきりと肯定的または否定的な態度・意識を示し、自分なりの障害児・者観を持つようになっていた。 ・10年前より1年生・3年生共に「理解」「実践的行為」「統合」因子で肯定的・好意的な回答の割合が増加しており、障害児・者への理解が深まり、共生に向けた態度や意識が高まってきている。

か 2012) [16]、障害者施設や特別養護老人ホーム等でのボランティア体験 (堀ほか 2007) [17]、(仲山ほか 2003) [18]、聾・盲・特別支援学校、身体障害児入所施設の体験学習 (堀ほか 2007) [17]、特別支援学校における介護等体験 (八藤後 2004) [4]、などはいずれも学生の障害観を肯定的に変化させていた。

2) 【障害児 (者) との接触体験は、肯定的な障害観育成に重要である】

高等教育機関入学前の障害児・者との出会い体験 (鈴木 2014) [13]、重度肢体不自由の高等部生との接触体験 (河津ほか 2012) [16]、障害者福祉論の体験学習 (河津ほか 2012) [16] など障害児 (者) との出会いや接触体験が学生の障害者観に肯定的な変化をもたらしていた。

3) 【学年が上がる程態度・意識が肯定的に変化する】

保育者養成課程の学生を対象者として1年毎に行った調査 (鈴木ほか 2016) [11]、(権明ほか 2015) [12]、(鈴木ほか 2014) [13] では障害を持つ子どもの受け入れの意識が肯定的に変化、福祉系大学の1年生と4年生の比較 (中山・向井 2006) [14] では上の学年の学生は共生感が強く、受容度が高い傾向があった。また児童学科の1年生と3年生の比較検討 (本保 2009) [15] では、「理解」「期待」「実践的行為」「統合」「責任」すべて3年生が高く、より好意的、意欲的だった。

4) 【障害観形成には、学生自身の感情や既存の知識、性別、専攻分野による特徴がある】

特別支援学校での介護等体験において、教育学部生への障害児の情報提供など事前指導が障害児・者観の肯定的変化に効果があった (八藤後 2004) [4]。また、障害学生との交流は女性のほうが男性に比較し積極的である傾向 (仲山ほか 2003) [18] も報告されている。

肯定的に変化させた報告がある一方で、作業療法学生の実習の前後では障害者観に変化はなかった (里村・栗原 1992) [19]。この結果は、作業療法科に入学してくる時点で障害者に対する意識が既にある程度固まっているのか、44.0%が「普通の人と変わらない」38.0%が「気の毒、かわいそう」と感じていたが、否定的なイメージはなかった (里村・栗原 1992) [19] ことによると推察される。

5) 【時代の変化とともに障害観も変化する】

児童学科学生の障害児 (者) に対する意識は、

1998年と2009年を比較し肯定的、好意的な回答が増加していた。また、「わからない」と回答した割合が減少し肯定的、否定的な態度・意識を示しており (本保 2009) [15]、これらは対象者の障害児・者との接触経験の増加と関連すると考察されていた。

また、歯科衛生士と歯科技工士を対象にした報告では、障害観に学年別や実習の前後で変化はみられなかった (雲野ほか 2011) [20]。これらは、それぞれの環境や将来の職業選択の違いが影響をしているのではないかと (雲野ほか 2011) [20] と考えられていた。

V. 考 察

1) 学生の障害観の形成に影響する要因

教育学の研究成果として、一般の障害理解の段階には5段階がある (山本 1997) [23] と言われている。その過程は、障害者への偏見の気付き、知識化、情緒的理解、態度形成、受容的行動 (山本 1997) [23] であり、看護学生が臨地実習において重症心身障害児 (者) を看護の対象として受容的行動をとり、包括的にとらえるためには、この5段階が促進されるような教育方法を検討する必要がある。そのため、高等教育機関における4年間の看護基礎教育を構造化し、学生の偏見を低下させより効果的な臨地実習を行うために、学生の障害観の形成に影響する要因を文献から検討した。

その結果、当事者と家族による講話と学生との対話、介護等体験など実習を行う、授業の一部としてのボランティア体験を行う、または高等教育機関入学前に障害児 (者) と出会う体験などの接触体験は、学生の障害観を肯定的に変化させていた。

また、高等教育機関に入学後、学年が上がるにつれて態度・意識が肯定的に変化していた。これは、学習の積み重ねが障害観の変容に影響を及ぼしたものと考えられる。また、今回の論文対象の学生が全て人間を相手にする専門職の教育機関で学んでおり、障害に対する考え方が入学前より否定的に捉えていない可能性がある。また、高等教育機関での教育内容も障害観の形成に影響を与えているものと考えられた。

その他、論文が書かれた時代の社会背景や人々の意識や価値観は高等教育機関で学ぶ学生の障害観に変化を与えていた。2010年に示されたインクルーシ

ブ教育の推進はまだ課題が多いとされる(原田 2018) [25]。一方で、高等教育機関で学ぶ学生にとっても障害児(者)と接触する機会が増え障害理解が促進されているものと推察される。

2) 障害(者)観に関する研究の動向

障害(者)観に関する研究は、79件あったが原著論文は15件と少なく、専門領域は保育、教育、看護、福祉、歯科関連や作業療法と多岐に渡り、発表年にも特徴はなかった。障害理解に関する研究は、教育学・特殊教育学などの分野において多数行われていた(高見 1995) [24] が、近年重度心身障害児(者)の増加や在宅医療の推進等の社会の変化とともに医療福祉の領域での研究が増加したと考えられる。今回の対象文献の研究方法は質的研究と量的研究の両方が含まれていた。また、質問紙法では共通の尺度は使われていなかった。障害(者)観を表す表現は様々であり、単純な比較検討は困難であったが、結果の類似性に着目し得られた結果により、障害児(者)を援助の対象として関わる専門職の教育方法への示唆を得た。

3) 障害児(者)の看護支援に関する看護基礎教育への示唆

(1) 障害児(者)との接触・援助体験

介護等体験、重症心身障害児施設実習、ボランティア体験など、障害児(者)と一緒に過ごす体験が障害(者)観を肯定的に変化させていた。これは、障害者から直接伝えられる情報によって、障害者本来の力・姿を理解する機会を得て、障害者との双方向的関係を体験することが肯定的理解につながるのではないかとされている(杉森 1990) [6]。また、一緒に時間を過ごすだけでなく、障害児(者)へ接触し援助を行うことで人間理解が深まるのではないかと考える。看護学生は入学前に7割以上が障害者との直接的接触体験があるとも報告されている(杉森 1990) [6] が、その障害の程度は測定されていない。臨地実習で対象とする重度心身との接触体験が対象理解の促進には必要と考えられた。

(2) 重度心身に関わる実習指導方法の工夫

実習前に障害児(者)と一緒に過ごし、できるだけショックを受けず肯定的イメージをもって実習に臨んでも、対象の個別の反応に気付かず交流することができないと、看護支援の学びに繋がらない。関心を高めるだけでなく、その質について検討するこ

とが重要と言われている(河内 2004) [10]。個々の学生が経験している障害児(者)の障害の種類や程度、感情などを考慮した上で、関わる障害児(者)の表現や変化の把握の特徴を臨地指導者に説明を依頼し、交流を促す、などの工夫も短い実習期間では特に必要と思われる。

(3) 計画的な事前指導

臨地実習を効果的に行うためには「重症心身障害児の特徴の理解」を教育課程の中で早期に行うことが重要とも言われている(岩田 2002) [7]。障害児(者)の身体的特徴や反応の意味、社会的背景や行動パターンなどの知識と理解を事前学習できるように計画することも重要となる。

VI. 研究方法の限界

今回の対象文献において障害児(者)観を明らかにする方法は、質的研究としては半構成面接法及び実習及び体験授業のレポートの内容の分析があり、量的研究としては自作の質問紙及び障害観尺度(河内 2004) [10]、自己効力感尺度(河内 2004) [10] の他、八藤後(2004) [4]、浅井(1999) [22] の作成した質問紙があった。質的研究と量的研究の比較は、障害児(者)観を対象者の言葉で表現した結果と選択肢による結果の比較検討であり限界がある。

また論文数も少ないため、今後検討した教育方法を実践する中でその効果を検証していく必要がある。

VII. 結 論

高等教育機関の学生のもつ障害(者)観に関する研究は15件であり、研究者の専門分野は多岐に渡っていた。しかしその結果から、看護基礎教育における障害児(者)への看護支援に関する教育方法について以下の示唆を得た。

- 1) 重症心身障害児(者)との接触体験、援助体験を実習前に持つよう教育課程に組み入れる。
 - 2) 重症心身障害児(者)施設でも実習を行うにあたり、計画的な事前指導と臨地実習指導者の協力を得て、重症心身障害児(者)の反応を早期に把握し、交流できるような指導方法を工夫する。
- 今後、これらに基づいた教育実践を計画実施しその効果の検証と評価が必要と思われる。

【引用文献】

- [1] 砥綿とも子・津田茂子・田中矩子・山本正士「看護学生の意識変化—重症心身障害児施設での体験より」, 聖マリア学院短期大学紀要, 12(8), pp.99-102, (1987)
- [2] 西脇由枝・大木伸子・梶山祥子「障害児施設での実習体験とそれを支えた要因—看護学生の小児看護学実習体験の分析から」, 東邦大学医療短期大学紀要, 9, pp.51-67, (1995)
- [3] 下見千恵「重症心身障害児に対する看護学生の印象の変化とその関連要因についての考察(第1報)」, 広島県立保健福祉短大紀要, 3(1), pp.31-38, (1997)
- [4] 八藤後忠夫・霜田浩信・星野常夫・水谷徹「介護等体験」が大学生の障害児・者観に及ぼす影響について—文教大学の事例から—, 教育学部紀要 文教大学教育学部, 38, pp.37-48, (2004)
- [5] D.F.ポーリット&C.T.ベック(著), 近藤潤子(訳)『看護研究—原理と方法』第2版, 医学書院, p.108, (2010)
- [6] 杉森みどり『看護教育学』第2版, 医学書院, pp.183-200, (1990)
- [7] 岩田みどり「障害者に対する看護学生の態度に関する研究—直接的接触体験の影響—」日本赤十字看護学会誌, 2(1), pp.86-93, (2002)
- [8] 大塚真代「看護学生の身体障害観 看護学生の実習レポートの分析」, 人権教育研究, 6, pp.44-51, (2006)
- [9] 松本智津・富岡美佳「重症心身障がい児病棟における小児看護学実習での学習効果に関する文献検討」, 山陽論叢, 24, pp.7-14, (2017)
- [10] 河内清彦「障害学生との交流に関する健常学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件, 対人場面及び個人的要因の影響」, 教育心理学研究, 52, pp.437-447, (2004)
- [11] 鈴木晴子・潮谷恵美・山田陽子・権明愛「保育者を目指す学生の障害観に関する研究(4)—大学4年生の語りからみた成長と課題—」, 十文字学園女子大学紀要, 47, pp.119-127, (2016)
- [12] 権明愛・鈴木晴子・潮谷恵美・山田陽子「保育者を目指す学生の障害観に関する研究(3)—障害のある子どもの保育についての考えとその変化」, 十文字学園女子大学紀要, 46, pp.81-88, (2015)
- [13] 鈴木晴子・権明愛・潮谷恵美・山田陽子「保育者を目指す学生の障害観に関する研究(2)—障害のある子どもとの出会い経験の実態把握」, 十文字学園人間生活学部紀要, 12, pp.217-225, (2014)
- [14] 中山哲哉・向井通郎「福祉系大学生における障害者観の変容—学年差の横断的検討」, 吉備福祉学部研究紀要, 11, pp.93-102, (2006)
- [15] 本保恭子「児童学科の学生の障害児・者に対する意識—10年前との比較から」, ノートルダム清心女子大学紀要, 33(1), pp.110-117, (2009)
- [16] 河津巖・長濱朋二・河田将一「重度肢体不自由の高等部生と共に取り組んだ学生の障害理解を深めるための授業の試み—学生の意識の変容を中心に」, 応用障害心理学研究, 11, pp.13-32, (2012)
- [17] 堀弘子・斎藤理恵子・高橋祐子・藤村和静「障害者福祉論の体験学習評価(第二報)—障害者観の形成について卒業前のアンケート調査結果から」, 神奈川県立平塚看護専門学校紀要, 13, pp.18-22, (2007)
- [18] 仲山佳秀「身体障害学生との大学内交流における社会福祉専攻学生の自己効力予期」, 人間の福祉, 13, pp.71-78, (2003)
- [19] 里村恵子・栗原トヨ子「作業療法学生の持つ障害者観」, 東京都立医療技術短期大学紀要, 5, pp.185-190, (1992)
- [20] 雲野泰史・腰川一恵「歯科技工学生および歯科衛生士学生の障害観に関する研究—専攻・接触経験・知識の違いによる比較」, 発達障害研究, 33, pp.195-207, (2011)
- [21] 関谷眞澄「保育士を目指す学生の『障害』観に関する一考察—障害児保育にかかわる『保育者』として」, 千葉敬愛短期大学紀要, 35, pp.1-10, (2013)
- [22] 浅井暢子「精神障害者に対する意識と受容」, 日本社会心理学会第40回大会発表論文集, 235, pp.234-232, (1999)
- [23] 山本哲也「障害理解関係文献一覧」, 障害理解研究, 2, pp.83-94, (1997)
- [24] 高見令英・向後礼子・徳川克己・桐原宏行「わかりやすい教育心理学」文化書房博文社, pp.203, (1995)
- [25] 原田公人「インクルーシブ教育システムの構築に際する多職種連携」, リハビリテーション連携科学, 19(2), pp.147-154, (2018)